様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年５月６日現在

機関番号：32658
研究種目：若手研究（A）
研究期間：2008～2011
課題番号：20688010
研究課題名（和文）　西アフリカにおける農業生産構造の解明と農業・農村開発の方途に関する研究
研究課題名（英文）　Study on Structure of Agricultural Production and Rural Agricultural Development in West African Countries.
研究代表者
中曽根　勝重（NAKASONE Katsushige）
東京農業大学・国際食料情報学部・助教
研究者番号：10366411

研究分野：農学
科研費の分科・細目：農業経済学
キーワード：国際農業

１．研究計画の概要

従来の西アフリカ農業に関する学術研究は、主として海外輸出向け換金作物を生産する地域を対象とする研究に重点がおかれてきた。

本研究の目的は、現地調査実施の可能性、研究成果の現地へのフィードバックの可能性などを考慮しつつ、現在、日本政府も積極的に支援活動を行っている西アフリカ地域を調査研究対象地域として選定し、その農業生産構造の解明による農業・農村開発ための具体的方途を探ることにある。そのため、本研究の実施期間は概ね４か年とし、具体的な研究対象国を、旧イギリス植民地であったガーナ、ナイジェリア、シエラレオネとし、各国の比較研究も視野に入れつつ、既存の文献と統計データの収集・分析および伝統的な農業を営む数か村（各国２～３か村）に現地実態調査の拠点を設け，以下の研究課題についての実証的研究を行う。すなわち，

（１）農家および集落レベルにおける営農体系の解明と農業生産構造分析
（２）農産物加工と流通システムの解明
（３）農民組織化の実態把握と参加型開発の可能性の検討
（４）営農技術の開発・普及システムおよび農民教育のあり方の検討
（５）農村社会システムと制度的改革
（６）農業開発政策の展開と課題，などである。

本研究の目的は「農業の担い手の存立構造を明らかにし、現地で営まれている営農様式を的確に把握した上で、農業・農村の開発方途を学際的・総合的視点から考究し，実現可能な具体的方策として提示する」ことであり，そのため，本研究では、農業経営学および農業経済学の分野を中心としつつ，社会科学分野における多面的かつ総合的な研究方法を採用して実施している。

２．研究の進捗状況

本研究ではその活動の大部分が海外の現地調査となっているため、研究を開始した2008 年度より、研究対象地域の西アフリカに滞在して実態調査を進めてきた。

実態調査では、研究目的にあげた６項目の研究課題を明らかにするため，村落レベル，家族レベレ，農民レベル，圃場レベレ，作物レベルという５つの段階からそれぞれの実態を把握するための聞き取り調査を行ってきた。

各項目の実態把握の状況に関しては以下の通りである。

（１）営農体系の解明と農業生産構造

研究対象地域の営農体系は，近年の市場経済化に伴い，今まで培われてきた農業様式が変化しつつある。この点もふまえた現地調査によるデータ収集を行った。

（２）農産物加工と流通システム

農産物加工は従来の技術に依存しており，また流通システムも慣習的な地場市場への依存度が高い。こうした状況の聞き取り調査を実施した。

（３）農民組織化と参加型開発

現在の農民組織の活動内容は具体性に乏しく，実態の把握は難しい。そのため，いくつかの農民組織の活動の調査を実施した。

（４）営農技術の普及と農民教育

営農技術の改善は，遅々としながらも着実に前進している。現在積極的に導入されつつある畜耕や外給財の導入などについて調査を実施した。

（５）農村社会システム
　現在，土地の分割や家族の移転などといった問題が露出してきている一方で，個人主義的な発送もみえつつある。こうした現状を把握するための調査を行った。
（６）農業開発政策の課題
　西アフリカのいくつかの国では，外貨獲得手段となる換金作物栽培を優遇する一方で国民を養うべき食料作物栽培は冷遇さるケースも少なくない。こうした現状を把握するとともにその問題点について調査を実施した。
　これまで実施してきた現地調査の結果から，多くの事柄が明らかになってきた。今後は，それらの実態を取りまとめ，学術的および総合的な視点からの農業・農村の開発方途を模索する。

３．現在までの達成度
　②おおむね順調に進捗している。
　本研究では、進捗状況でも記したように，現地での実態調査によって研究課題の解明に努めてきた。現在までの目的にあげてきた現地調査の実施内容については，研究課題の６項目のほぼ全域でデータ収集を行っているため，本研究課題はおおむね順調に進捗していると判断される。

４．今後の研究の推進方策
　今後の研究の進め方として，これまでに収集した調査データを早急に取りまとめ，最終年度である平成 23 年度には，実態把握の不足箇所の整理行った上で，補足調査を実施し，最終的なとりまとめ作業を行う予定である。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
J. J. Mghase, H. Shiwachi, K. Nakasone, and H. Takahashi, Agronomic and socio-economic constraints to high yield of upland rice in Tanzania , African Journal of Agricultural Research, Vol. 5(2), 2010, pp.150-158　（査読有）

〔図書〕（計２件）
１）中曽根勝重，食の検定・食農１級公式テキストブック，農文協，第１章「農」第３節世界の農業構造；世界の農業，2011，（pp.92-105）
２）中曽根勝重，ガーナを知る 45 章，明石書店，担当箇所「第６章ガーナの地理、自然環境」「第 11 章ガーナ北部の観光」「第 13 章農村の生活」「第 27 章　イスラム教徒の信仰と生活」（現在印刷中）